ます．

引用文献

小林嘉光 1974．天草の植物．47 pp.
中西弘樹1996．九州西廻り分布植物: 定義，構成，起源．植物分類・地理 **47** (1): 113–124.

（東北大学大学院理学研究科附属
八甲田山植物実験所）

新　刊

□千原光雄（編）: **藻類の多様性と系統**　バイオディバーシティ　シリーズ　3　346 pp. 1999．裳華房．¥4,700＋税．

全7巻で生物界を通覧する企画の第3回配本である．すでに，総論の部分と（陸上）植物の部分は刊行されている．この巻では，日本を代表する24人の藻類学者がそれぞれ得意の分野について，総説，各論，コラムなどを分担執筆している．藻類は植物の一部とされたり，原生生物に含められたりするが，種数の総計に比して，諸々の形質の多様性の幅の広いことは知る人ぞ知るである．生物学にとって，とりわけ今や生物学のもっとも興味深い解析の対象となっている多様性の生物学にとって，藻類の研究の現状がこのように正確に，活き活きと描き出されたのは，生物学に関心をもつすべての人にとって得難い情報提供と言え，まさに時期を得た出版であると言えよう．

全体は3部構成で，第1部「藻類の多様性と分類体系」は編者がこれまでの豊かな研究体験を生かした総説をものされ，第2部の「さまざまな形質からみた藻類の多様性と系統　進化」では，8章にわたって，藻類をみるための手掛かりとなる形質，手法についての現状が紹介される．第3部は「植物群ごとの特徴－図版解説とコラム」で，11の門について簡潔な要約が，よく考えられた図版を参考にしながら提示され，さらに16個のコラムで，今日的な話題が紹介されている．最後の分類表と文献も，本書の貴重な構成要素となっている．多様性の植物学に関心をもつ人にとって大変貴重な参考書となるだけでなく，生き物に関心のある人すべてが，藻類という興味をそそる生物がどのように生きているか，この参考書から学ぶことは多いに違いない．（岩槻邦男）

□宮田昌彦: **潮だまりの海藻に聞く海の自然史**　131＋11 pp. 1999．岩波書店．¥1,900＋税．

自伝風で始まる記述を読み進むうちにいつしか舞台は陸と海の境界域「潮間帯」となり，ここに生える海藻のヒジキやワカメの口開けの風景が導入され，次いで，藻類の分類，潮間帯をつくりだす潮の干満，潮間帯の海藻の分布，なぜ成層（帯状）分布をするか，海藻はなぜ色が違うのか，成育の深さへの色による適応などの説明で1章が終わる．2章は一転してシアノバクテリアと細胞内共生によって出現する生命体の進化史が語られ，3章は多様性がもっとも高い生態系といわれるサンゴ礁を紹介し，生物群集がつくりあげた地球最大規模のこの構造物もまた単細胞藻 Zooxathellae（褐虫藻）とサンゴ虫の細胞内共生に由来することが語られる．4章は著者が専門とする石灰紅藻サンゴモの話しで，石灰化の機構とサンゴモの分類の説明に加え，「磯焼け」とその元凶とされるサンゴモとの関係に記述の焦点が当てられる．「磯焼け」は，実はサンゴモがウニ幼生の海底への着生と変態を誘発する化学物質を海中に放出するため，ウニが繁殖して海藻を食べつくす現象であるとする谷口和也氏らの研究を紹介し，これは一種の生存戦略であり，サンゴモと海産無脊椎動物との群集レベルの共生系でもあると著者は考える．5章ではサンゴ礁が再度取り上げられるが，ここでの主題は地球温暖化対策へのサンゴ礁の役割で，地球規模の二酸化炭素循環に関わることで褐虫藻を共生生物とするサンゴ礁は地球レベルの共生系をつくりあげていると結ぶ．著者によると，全編を流れる主題は「適応」と「共生」であるという．

巻末に11頁に亘り引用文献と参考文献が添えられる．書名から，磯や潮だまりの海藻観察の手引きになる自然誌が語られると連想